

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月13日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820020

研究課題名（和文） 1920年代フランスにおける「前衛音楽」の表象

研究課題名（英文） The representation of “avant-garde music” in the 1920s French musical criticism

研究代表者

成田 麗奈 (NARUTA REINA)

東京芸術大学・音楽学部・助手

研究者番号：30610282

研究成果の概要（和文）：本研究は1910-1929年間における音楽雑誌を調査し、「前衛音楽」がどのように表象され、「フランス音楽の発展」という見地からどのように評価されたのかを明らかにする。当時の音楽批評においては、西洋音楽史におけるフランス音楽の優位性を希求する傾向がみられる。それゆえ、革新的な音楽語法を追究する「前衛音楽」の動向に多大なる関心を寄せ、フランス音楽の発展を正当化すべくフランスにおける「前衛音楽」を評価しようという意図が見てとれる。

研究成果の概要（英文）：This project investigates musical criticism between 1910-1929 in order to clarify how musical periodicals described “avant-garde music” and what they evaluated in the context of the “Evolution of French Music” at that time. At that time, critics desired to demonstrate the supremacy of France in the history of western music. To achieve that goal, they attracted attention to “avant-garde music”, sought the innovation of language musical in Paris, and intended to authorize the evolution of French music.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：前衛・フランス音楽・音楽批評・1920年代・調性

1. 研究開始当初の背景

西洋音楽史研究において、「前衛音楽」とはもっぱら第二次世界大戦（WWII）後の音楽を指し、第一次大戦（WWI）前後のいわゆる「歴史的な前衛音楽」には関心が払われなかった。しかし、「前衛音楽」という概念が成立したのは WWI 後のことで、特に 1920 年代は「前衛音楽」が推進された重要な年代であり、音楽史的観点から当時の状況を検証す

ることには大いに意義がある。

1920年代の「前衛音楽」に関しては、従来オーストリアにおけるシェーンベルクによる無調および十二音技法のみが注目されてきた。これは当時のフランスについて、先行研究で新古典主義という認識が定着していたことにも起因する。だが、WWII 後に前衛音楽の中核となったダルムシュタット現代音楽講習会の第1回では1920年代フラン

スの前衛的音楽語法として多調性が取り上げられており、歴史的重要性は高いといえる。

2. 研究の目的

それゆえ、本研究は、1920年代フランスにおいて「前衛音楽」がどのように表象されていたのかを明らかにし、その音楽史・文化史的意義について考察することを目的とする。

西洋音楽史研究において重要なテーマであるにもかかわらず、「歴史的前衛音楽」に関しての先行研究は数少ない。M. Duchesneau (1997) はフランスにおける前衛音楽を歴史的に概観した唯一の研究である。彼は1920年代の前衛音楽について、独立音楽協会、ソシエテ・トリトン、セレナーデなど音楽協会の取り組みに焦点を当てて研究している。だが申請者は博士論文において、当時前衛音楽として表象された作品は、こうした音楽協会よりもむしろ J. ヴィエネル、J. バトリをはじめとする個人主催の演奏会において頻繁に取り上げられたこと、スウェーデン・バレエ団 (1920-25) が前衛を呼び物としていたことを明らかにした。それゆえ、Duchesneau の扱う音楽協会の演奏会では漏れ落ちてしまう「前衛音楽」の演奏会が甚だしく多いこと、「前衛音楽」の概念整理が曖昧であり、演奏会プログラムの資料集としての側面が強いことが問題点として挙げられる。このことから、本研究では①1920年代フランスの言説空間において「前衛音楽」として表象されている事例を具体的に検証し、②当時の演奏会プログラムから前衛の担い手となった人物・拠点になった場を詳細に調査する必要がある。

もうひとつ重要な研究として、Butler (2004) を挙げることができる。彼が20世紀初頭の前衛音楽について提示した視点として特に注目すべきは①カノン化されたパラダイムの超越、②音楽家が革新者としての自覚を持っていることの2点であり、本研究の依拠するところも大きい。だが、概念的に具体的な裏付けを欠き、取り上げる作品も恣意的かつ羅列的である。本研究は一次資料に基づいてこうした視点に具体的な例証を提供することができると考えている。Butler の提示した2つの視点をふまえ、申請者は次のような補足的且つ事例に即した論点を提示する。①に関してはカノン化されたパラダイムとしての調性にどう向き合うか、新たな超越的音楽語法の創出において、同時代の諸外国、とりわけドイツ・オーストリアにどう対抗しようかという問題軸が存在する。このことから、カノン化された「ドイツ的調性」である機能と声の超越と、同時代のオーストリアにおける無調性に匹敵しよう前衛的音楽語法として、多調性に可能性が見出されて

いたことを実証する。②に関して、モダン時代における革新と1920年代の前衛との決定的な違いとして、音楽家が革新者としての自覚するにとどまらず、言説空間において革新者としての自身の価値を発信し、西洋音楽史に正当に位置づけようと自らを歴史化する行為が重要であると考えられる。申請者は博士論文第5章においてこの問題を取り扱った。1920年初頭、六人組のうちとりわけミヨーとオネグルが多調性による作曲を積極的に行い、批評活動を通じてその革新性と歴史的意義をアピールした。このことが注目を集め、多調性は和声的革新・前衛性の象徴とみなされ、フランス音楽の進歩を顕示するものとして評価されており、六人組は前衛音楽の担い手として評価された。その革新性を批評家たちが「フランス音楽史」という文脈で正当化することで、六人組は音楽家としての評価を確立したのである。すなわち、「前衛音楽」をめぐる言説は、作曲家の正当性と深く関わる問題でもあった。批評家を巻き込んだ「六人組」という言説上での一連の振る舞いは、作曲家自身が自らを歴史化する行為であったことが指摘された。本研究では博士論文の成果をふまえて、こうした問題が六人組以外の音楽家にも当てはまる問題であると考え、こうした「前衛音楽」をめぐる議論が展開されてゆく過程を検証する。

3. 研究の方法

2011年4-7月にかけて研究の基礎的作業として、先行研究の整理を行う。具体的には Duchesneau (1999) に関して批判的精読を行い、「前衛音楽」演奏会として抜け落ちているものを精査する。Duchesneau はモントリオール大学において近現代フランス音楽に関する共同研究を行っており、その成果が近日刊行される予定であるため、刊行され次第参照し、本研究に活用する。また、Butler (2004) において提示された①カノン化されたパラダイムの超越、②音楽家の革新者としての自覚、という視点に関して、彼の著作や他の研究者の先行研究もふまえて批判的考察を加え、申請者独自の視点を提示する。また、前衛音楽をめぐる言説の背景として、政治的事情もふまえておかねばならない。これに関しては J. Fulcher の研究を参照するが、彼女は1920年代のフランスについて古典主義・復古主義との関連からしか論じていないため、「前衛音楽」に関する視点が抜け落ちている原因も究明しながら批判的に参照する。

8月以降は、本研究の根幹をなす資料調査を行うための予備的調査を行う。当該年度は音楽雑誌を中心とした調査を行う。既に博士論文の成果から、「前衛音楽」の推進に関わった音楽雑誌は特定されているが、より包括

的な調査を行うため、ニュー・グローヴ音楽事典オンライン版「Periodicals」の項目からフランスの音楽雑誌一覧を参照し、当時刊行されていた音楽雑誌の全体像を把握したうえで、追加調査の必要性がある資料を選定する。9-12月にかけては、国内での資料調査として、東京芸術大学付属図書館所蔵の『Revue musicale』、BNFの電子図書館GallicaからWeb上で参照できる資料として『Ménestrel』の調査を行う。

2012年1月下旬～2月初旬にフランスでの第1回目の資料調査を行う。資料調査から「前衛音楽」概念について実証的調査を行う。一次資料として1920年代フランスの音楽雑誌・文芸誌・日刊紙における音楽批評、当時フランスで刊行された音楽史書を対象とし、「前衛音楽」がどのように表象されていたのかを具体的に検証する。これをふまえて①「前衛音楽」の表象が同時代の国外の音楽文化とどのように関連しているのか、②後世の音楽観・進歩史観にどのような影響を与えたのかを明らかにするとともに、③文芸・美術など他分野の芸術における「前衛」とどのように関連しているのかを検証し、音楽史・文化史的意義について考察を行う。

2012年度は資料調査の成果をふまえて研究発表を行い、研究者との議論を通じて考察を深め、資料の追加調査を行い、研究成果をとりまとめる。

4. 研究成果

2011年度は調査に先立ち、1920年にパリで結成され前衛を呼び物としたバレエ・スエドワにおける六人組作品に焦点を当て、博士論文の成果をふまえて紀要論文を執筆した。1920年代当時の批評誌における評価軸としては、前衛性および革新性、新しさが注目を集めており、前衛的な作曲技法としては、具体的には多調性が議論的となっていた。こうした前衛音楽家としてのイメージは、必ずしも肯定的なものではなかった。しかし、否定的な評価をされることは必ずしもデメリットではなく、若手作曲家にとっては、批評誌において無難に扱われることよりも、多少の議論を引き起こしても注目を集めることのほうが、芸術家としての名声を獲得していくうえで有利なことであったともいえる。

調査の過程で、1920年代フランスの音楽批評において、前衛をめぐる議論の中心となった人物としてエミール・ヴュイエルモーズの重要性が浮かび上がった。それゆえ、2013年2月パリにおける資料調査では、マーラー音楽資料館所蔵のFond Vuillermoz所収の資料を調査し、ヴュイエルモーズの音楽批評記事を収集した。同時にシャルル・ケックラン、ボリス・ド・シュレゼールら、他の音楽批評

家の批評記事も調査した。これらの調査から、1920年代フランスにおける「前衛音楽」をめぐる言説の背景には同時代のドイツ・オーストリアの音楽批評との関係、第一次世界大戦以前のフランスにおける音楽批評との関連性について考察する必要があると判断された。それゆえ、次年度は1930年代以降という申請時の計画を変更し、1910年代における音楽批評について調査の範囲を広げ、まずはRevue Musicale S. I. M誌に焦点を当てて調査を行い、7月にパリにおいて開催されるFrancophone Music Criticism定例会議で研究発表を行った。ここでは、「前衛音楽」という語の表象について、他国の言説も含めて考察する必要性が指摘された。同時に、S. I. M誌の革新的傾向やRevue Musicale(1920-)との関連性に着目した本研究の意義については評価された。

2012年度の後半は、調査対象を広げるのではなく、前衛音楽に関する批評を積極的に行ったS. I. M誌とRevue Musicale誌に焦点を当て、両誌の関連に焦点を当てて調査分析を行った。その結果、「前衛」および関連語の「革新的」、「新しさ」といったキーワードで語られる音楽については、「多調性」、「無調性」、「カコフォニー」といった和声的側面から議論されていることが明らかになった。一方で、理解不可能なもの、批判すべきものという意味合いで、「キュビズム」、「ボルシェヴィズム」、「スティール・ボッシュ（ドイツ野郎の様式）」という語も「前衛音楽」に対して頻繁に用いられている。

こうした価値観は19世紀的音楽観を引き継ぐものではあるが、その背景としては対ドイツ・オーストリアという視座があるために、こうした価値観からの議論を戦略的に行う必要性があったと考えられる。それゆえ、主としてドイツ・オーストリアの音楽雑誌および音楽史書における「前衛音楽」の表象と比較しながら、1920年代フランスにおける「前衛音楽」の表象についてさらなる考察を深めることが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

成田麗奈「バレエ・スエドワ(1920-1925)と前衛音楽家としての『フランス六人組』イメージの形成をめぐる一考察」、『東京芸術大学音楽学部紀要』、査読有、第37集(平成23年度)、2012年3月15日(ISSN 0914-8787)。
<http://www.lib.geidai.ac.jp/MBULL/37Naruta.pdf>

〔学会発表〕（計1件）

成田麗奈、「The Revue musicale S. I. M. and avant-garde Music in Paris」、Francophone Music Criticism Network Meeting、University of London Institute in Paris (France)、2012年、7月12日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

成田 麗奈 (NARUTA REINA)
東京芸術大学・音楽学部・助手
研究者番号：30610282

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：